# 宇陀市内の万葉歌碑

## 榛原小学校 前の道沿い
（巻 4-504）

君が家に
吾住坂の　家道をも
吾は忘れじ　命死なずは

住坂の家道も（あなたのことも）私は忘れまい、生きている限りは

（柿本人麻呂の妻）

③

## 榛原西小学校 碑表 / 碑陰
（巻 3-241）
（巻 3-239・240）

大王は　神にしませば
真木の立つ
荒山中に　海を成すかも

わが大王（長皇子）は神でいらっしゃるから眞木（杉や桧）の立っている人気のない山の中でも海（狐路の池）をお造りになることよ

（作者未詳）

⑦

やすみしし我が大王高照らす　わが日の御子の馬並めてみ獵立たせる弱薄を獵路の小野に猪鹿こそばいま旬ひ猪鹿こそばいま旬ひ過ほれ猪鹿じもの　いま旬ひ好み　鶉なす　いま旬ひ過ほり　恐みと　仕へ奉りて　ひさかたの天見るごとく　真澄鏡仰ぎて見れど　春草の　いやめづらしき　わご大王かも

反歌一首

ひさかたの天行く月を網に刺しわご大王は蓋にせり

日の神の末であるわが仕え奉る皇子が、人々と馬を並べて、み狩を遊ばす、ここ狐路の野では、鹿は皇子の尊さに這（ほ）うて拝み奉り、鶉は這うたままうろうろしている。我々もその鹿のように、這うては拝み、鶉のように、お仕え申し上げて、あたかも、天を見るように、仰ぎ見奉るけれども、何時も結構に拝されるわが仕える皇子の御立派さだ

わが仕えまつる皇子のご威光は、盛んなものだ。空を渡る月を、網で通してお側の人に引かせながら、翳（さしば）にして

（柿本人麻呂）

## 大宇陀 地域事務所
（巻 1-49）

日並の
皇子の命の　馬並めて
み狩立たしし　時は来向ふ

亡くなられた草壁皇子が馬を並べて御狩にお出かけになった時刻が今迫って来る

（柿本人麻呂）

⑬

## 榛原あかね台 わかくさ公園
（巻 8-1609）

宇陀の野の
秋萩しのぎ　鳴く鹿も
妻に恋ふらく　我にはまさじ

宇陀の野の秋萩を押し分けて鳴く鹿も妻を恋しく思うことでは私より勝りはしないだろう

（丹比真人）

④

## 榛原池上 蓮昇寺
（巻 16-3831）

池上乃
力士舞かも　しらさぎの
桙啄ひもちて　飛びわたるらむ

池の神の伎楽の力士を舞うのであろうか、白鷺が桙をくわえて飛び渡っているのは

（長忌寸意吉麻呂）

⑧

## 県畜産試験場
（巻 7-1376）

大和の　宇陀の真埴の
さ丹付かば
そこもか人の　我を言なさむ

⑩と同じ歌

（作者未詳）

⑪

## 大宇陀迫間 阿紀神社
（巻 1-46）

阿騎の野に
宿る旅人　うち靡き
寐も寝らめやも　いにしへ思ふに

阿騎の野に旅寝をする人々は、のびのびと横になって眠っているのであろうか。いや誰も眠るにも寝られやしない、草壁皇子がいらっしゃった昔の事がいろいろ思い出されて

（柿本人麻呂）

⑭

## 墨坂神社
（巻 4-504）

君家爾吾住坂乃家道
毛吾者不忘命不者

③と同じ歌

（柿本人麻呂の妻）

⑤

## 榛原八滝 文祢麻呂墓
（巻 8-1580）

さを鹿の　きたちなく野の
秋はぎハ　つゆ霜おひて
散りにしものを

雄鹿が来てたたずんで鳴く野の秋萩は、露霜をかぶって散ってしまった

（文忌寸馬養）

⑨

## 大宇陀上新 神楽岡神社
（巻 1-47）

ま草刈る
荒野にはあれど　黄葉の
過ぎにし君が　形見とぞ来し

草を刈る荒野ではあるが、黄葉の散るごとく亡くなられた草壁皇子の形見の地であると思ってやってきた

（柿本人麻呂）

⑫

## 人麻呂公園（像の台座）
（巻 1-48）

東の　野にかぎろひの
立つ見えて
かへり見すれば　月かたぶきぬ

⑯と同じ歌

（柿本人麻呂）

⑮

## 榛原篠楽 極楽寺
（巻 12-3089）

遠つ人
猟路の池に　棲む鳥の
立ちても居ても　君をしぞ思ふ

遠来の客であるという雁の名にゆかりをもつ、猟路の池に住む鳥のように立っても座ってもしきりにあなたを思い続けています

（作者未詳）

⑥

## 榛原赤埴 赤埴甲公民館
（巻 7-1376）

倭の宇陀の　真赤土の
さ丹着かば
そこもか人の　吾を言なさむ

大和の宇陀の真赤土の赤い色が着物についたならば、そのことで人たちが私のことをあれこれと噂を立てるだろうか

（作者未詳）

⑩

## 大宇陀迫間 かぎろひの丘
（巻 1-45）（巻 1-48）

やすみしし　我が大君　高照らす　日の御子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　都を置きて　こもりくの　泊瀬の山は　真木立つ　荒山道を　岩が根　禁樹押しなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば　み雪降る　安騎の大野に　旗すすき　小竹を押しなべ　草枕　旅宿りせすき　古思ひて

わが大君（草壁皇子）の皇子である軽皇子は、神にふさわしくふるまわれるとて、都をあとにして、泊瀬の山は真木の茂り立つ荒々しい山道を、岩さえぎる木々を押し伏せ、坂鳥のように朝お越えになって、夕方のなると、み雪降る安騎の大野に、旗のように靡くすすきや小竹を押し伏せて。旅寝をなさる。

（柿本人麻呂）

東の　野にかぎろひの　立つ見えて
かへり見すれば　月かたぶきぬ

東の野に陽光が上がり、振り返れば月が西に沈んでいく

（柿本人麻呂）

⑯